

被服製作実習の授業時間外学習に対応可能な教材整備

—ゆかた製作における画像資料・部分見本の導入—

難波 知子

1 はじめに

本稿は、お茶の水女子大学において2017年度前期に開講した服飾文化実習の履修者へのアンケート調査の結果より、ゆかた製作に関する各種教材の評価を行い、授業時間外の学習にも有用な教材整備および授業方法の改善に役立つものである。本学における和裁の授業は東京女子高等師範学校の時代から行われ、新制大学発足後においても単・袴の長着や羽織などの製作が教授されてきたが、学部・学科の再編を経た現在では、生活科学部の生活文化学講座の選択科目として、ゆかたを製作する実習科目（非常勤講師担当）が一つ残るのみである。日常の衣生活において和服を着用したり、製作したりすることが少なくなった今日、大学の実習科目として和裁を取り扱うことは、必ずしも実生活への対応や和裁技術の習得を目的とはしておらず、むしろ和服や服飾史を学ぶ契機として位置づけ、日本の服飾文化をより深く理解することを目指している。

近年の服飾文化実習の履修者数は、洋裁を学ぶ実習科目よりも多い傾向があり、「自分で作ったゆかたを着て夏祭りに行きたい」という意欲や動機をもって積極的に履修するなど、学生の和服への関心の高まりがみてとれる¹⁾。しかし和服に対する関心が高まる一方、それを製作する学生の裁縫技術についてはレベルの低下が指摘されている²⁾。既製服の購入が当たり前になったことに加え、中学・高校の家庭科においても被服製作が必修でなくなり、家庭でも学校でも製作経験に乏しい学生が増えたことが主たる要因と考えられよう。服飾文化実習の履修者をもみても、学生によって技術や経験に差が認められ、実際のゆかたの製作進度にも大きな差が生じている。特に製作経験が乏しい場合、なじみのない和裁技術の習得や手縫いの分量の多さについていけず、授業の進行に対し大幅な遅れを生じさせてしまうことがある。また作業が遅れた場合、次回の授業までの宿題となり、指導者のいない授業時間外に取り組むことになるが、その際、配布された資料だけでは十分に理解ができないこともある。そこで、こうした学生の技術・経験の個人差や実際の作業進度の差に対応することのできる教授方法の開発が今後必要とされる。具体的には、現在の履修学生の理解力や技術力を把握し、説明方法や教材を見直し、さらなる整備を行っていくことである。

筆者は昨年より指導補助として服飾文化実習の授業に参加し、学生の学習状況を観察する他、授業担当者とともに履修者への授業アンケートを行い、各製作工程の画像や実物見本の教材が必要であることを確認した³⁾。昨年度の調査結果を踏まえ、筆者と授業担当者は2017年の2～3月にかけて、2分の1サイズのゆかたの製作工程を撮影し、さらに2分の1サイズの実物見本を製作した。今年度の授業では、撮影した画像を使用して資料（パワーポイント）を再構成し、授業時に配布するとともに、Web上（お茶の水女子大学Moodle：授業履修者のみ閲覧可）にも掲載し、いつでもどこにおいても資料が確認できるようにし

た。実物見本は、授業前半の説明時に提示し、授業時間外にも学生が確認できるよう実習室に配備した。本稿はこれら教材の評価を今年度の履修者へのアンケート調査により確認し、さらなる授業改善に取り組むことを目的としている。

2 授業方法とアンケート調査の概要

1) 対象科目の履修状況と授業計画（シラバス）

2017年度前期の服飾文化実習の履修者は11名であった。11名の内訳は、2年生が10名、3年生が1名である。履修者の専攻は、生活科学部の生活文化学を主プログラムとして選択している者が10名、それ以外が1名（2年生）である。なお、生活文化学を主プログラムとして選択している学生総数は、2年生が14名、3年生が18名である。

2017年前期の服飾文化実習の授業計画は、表1の通りである。昨年度との違いは、繰り越し⁴⁾と内揚げ⁵⁾を省略し、作業工程を簡略化させた点である。これらは布地の傷んだ時などに前後の布地を入れ替えて仕立て直しをする工夫・伝統的な知恵であるが、昨年度の調査から、これらの工程が複雑で理解がむずかしく、作業時間がかかりすぎたため省略し、説明のみとした。

表1 2017年度の服飾文化実習のシラバス

	授業内容
1	ガイダンス、採寸、用具説明、地直し
2	見積もり、身頃の柄合わせ、身頃の裁断
3	身頃のしるし付け、袖の柄合わせ、袖の裁断
4	袖のしるし付け、袖縫い
5	背縫い、肩当て付け
6	衿の柄合わせ、衿の裁断、衿のしるし付け
7	衿付け、衿の縫い代の始末
8	衿の柄合わせ、衿の裁断、衿のしるし付け
9	衿肩開きのしるし付け、衿付け
10	三つ衿芯、衿先の始末、衿のくけ縫い
11	掛け衿付け
12	脇縫い、脇の縫い代の始末
13	袖付け
14	いしき当て付け、裾縫い
15	着装実習

2) 授業方法

授業は、2017年4月から7月にかけて15回（1回90分）のスケジュールで実施した。15回目の最終日は着装実習を行う予定としたため、実質的には14回の授業でゆかたを完成させるよう各製作工程を配分している。教科書は指定せず、担当教員が作成した資料⁶⁾を各回の授業で配布し、お茶大Moodleにも掲載した。授業の前半において資料（パワーポイント）と実物見本を提示しながら、各工程の製作手順を説明した。なお、説明時には進度の差を考慮して、前回の復習から始め、続けて当日行う作業を説明するようにした。説明後は、机間をまわりながら学生の個別の質問を受け、進行状況をチェックした。

昨年度との違いは、お茶大Moodleに資料を掲載したこと、実物見本を提示した点である。今回新たに用意した実物見本の種類と数を表2に示す。すべて2分の1サイズとした。

表2 実物見本の種類と数

袖	2点	袂の丸みの付け方
		完成形
衿	1点	三つ折りぐけ
身頃	1点	背縫い
		衿付け
		肩当て付け
衿	5点	衿付け、三つ衿芯の付け方
		衿先の始末①針の入れ方
		衿先の始末②衿先の止め
		衿先の始末③衿先縫い代の止め
		衿先の始末④衿先縫い代の折り返し
脇	4点	縫い代2枚を片側に倒す始末法
		片側に倒す場合のきせの押え方
		縫い代2枚を開く始末法
		開く場合のきせの押え方
裾	1点	
完成形	1点	いしき当て付けの見本を兼ねる

3) アンケートの概要と検討項目

授業アンケートは、13回目の授業が終わった2017年7月18日に配布し、15回の授業終了後8月9日までに回収した。アンケート調査は昨年度と同様、メールで質問紙を送り、記入したファイルを教員に返送することとした。

質問項目は、1) 授業の履修理由(自由記述)、2) これまでに製作したことのある作品、3) 製作技能の自己評価および製作に対する意識、4) 和服の着用経験と関心、5) 授業前後の縫い方・部位名称に対する理解度、6) 資料の分かりやすさとやり直した箇所、7) 実物見本の評価とその他教材の要望、8) 授業時間外での作業内容と時間、9) 授業改善のための提案(自由記述)、10) 実習を終えての感想(自由記述)である。質問項目1～5、8～10は昨年度と同様としたが、6と7については、ゆかた製作の各工程を見直し、20項目に分けて理解度や教材の評価・要望を調査した。また質問項目7については、今年度の授業から導入した実物見本の評価を問う項目を付け加えた。

3 アンケート結果

1) 履修者の製作経験と和服に関する関心(質問1～4の結果)

履修理由としては、「和服に興味がある」「自分で作って着てみたい」「夏に向けてつくりたい」「ものを作るのが好きだから」などがあげられた。近年の傾向と同様⁷⁾、和服への関心が高い様子が窺える。また開講時期が前期であることから、授業終了後の夏休みに着用することを目指して製作に意欲的に取り組む者が多数見られた。

小学校から高校までの家庭科の授業で製作した作品について、表3に示す。これまでに製作した作品には、エプロンや手提げ、小物類が多くあげられており、被服そのものを学校で製作した経験がほとんどないことが分かった。一方、授業外ではぬいぐるみや髪飾りなどの小物類からワンピースや衣装まで、さまざまな作品を製作した経験をもっていた。手軽にできるものから複雑で難易度の高いものまで、個々の関心や活動に応じて取り組まれている。

表3 これまでに製作した作品

	授業で製作	授業以外で製作
小学校	エプロン(9名)、ナップザック(4名)、手提げ・ランチョンマット(2名)、巾着・コースター・ポシェット・法被・クッションカバー(1名)	ぬいぐるみ(4名)、ポーチ・マフラー(2名)、ペンケース・手提げ(1名)
中学校	布絵本・手提げ(3名)、ハーフパンツ・エプロン・ランチョンマット・ブックカバー(1名)	髪飾り(2名)、巾着・ポーチ・ぬいぐるみ・マフラー(1名)
高等学校	エプロン・ブックカバー(2名)、巾着(1名)	エプロン・ドレス(2名)、ワンピース・スカート・ズボン・ベスト(1名)
大学入学後	ブラウス(1名)	ワンピース(5名)、スカート(3名)、衣装(2名)、エプロン・ベスト(1名)

被服製作の技能レベルの自己評価(5 高い 4 やや高い 3 ふつう 2 やや低い 1 低い)について、図1に結果を示す。平均は2.8であった。「ふつう」と回答した者が最も多く、「高い」「やや高い」と答えた者よりも、「やや低い」「低い」と回答した者が1名を上回った。昨年度の平均も2.7で、同じような傾向となっている。「高い」「やや高い」と答えた学生は授業以外でもいくつもの作品をつくり、豊富な製作経験があるが、「やや低い」「低い」と答えた学生は授業以外での作品数や種類は少ない傾向がみとめられた。

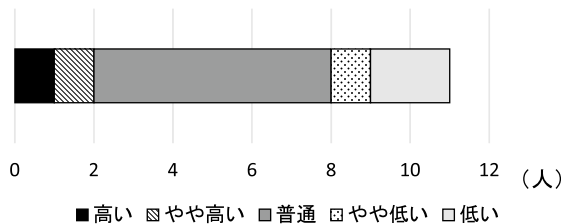


図1 被服製作に関する技能レベルの自己評価

また「製作実習が好きである」との質問に対しては、11名全員が「そう思う」「ややそう思う」のどちらかを回答し、製作に対して好意的な印象をもっていることが分かった。

和服の着用経験については、全員が「ある」と答え、「今年の夏にゆかたを着たいか」の質問には1名を除き、10名が「着たい」と回答した。また和服に関する関心の項目(5 興味がある、4 やや興味がある、3 どちらともいえない、2 あまり興味はない、1 興味はない)と項目ごとの平均点は、「着付け」4.7、「色・柄」4.7、「きもの・ゆかたと帯の組み合わせ」4.9、「帯結びのアレンジ」4.9、「流行」4.1、「歴史」4.4、「TPO」4.7、「人生の節目で着るきもの」4.5となった。個人の平均点は4.6となり(昨年度は4.5)、実際に着用する際のコーディネートやアレンジ方法が最も高い点数となった。着用への意欲・関心が窺える結果である。

2) 縫いや部位の名称に対する知識・理解度（質問5の結果）

和裁の製作技法（三つ折りぐけ、耳ぐけ、きせ、本ぐけ）について、授業前に知っていたと回答したのは、「三つ折りぐけ」「きせ」に各1名いたのみで、「耳ぐけ」「本ぐけ」は11名全員が知らなかったと回答した。授業後に理解できたかを尋ねた項目では、「きせ」について「どちらともいえない」と回答した者が1名いたが、その他の技法についてはおおむね理解できていた。また、各部の名称（8項目）については、「衿」「肩山・袖山」を授業前に知っていた者は多かったが、「前幅・後幅」は全員が知らず、「衿肩開き」「繰り越し」「内揚げ」も1名を除き知らなかった（図2）。知っていたと答えた1名は日本舞踊を習った経験があり、きものなじみがあった。このように和服に接する特別な機会をもたなければ、和服の製作技法や部位名称を知らない場合がほとんどである。さらに、授業後の理解度を尋ねた項目では、「あまり理解できていない」と答えたのが「繰り越し」5名、「内揚げ」4名であった。これらは説明のみであったため、具体的な理解にまで到達できなかったと考えられる。その他の項目については、授業後にはほぼ理解できていた。

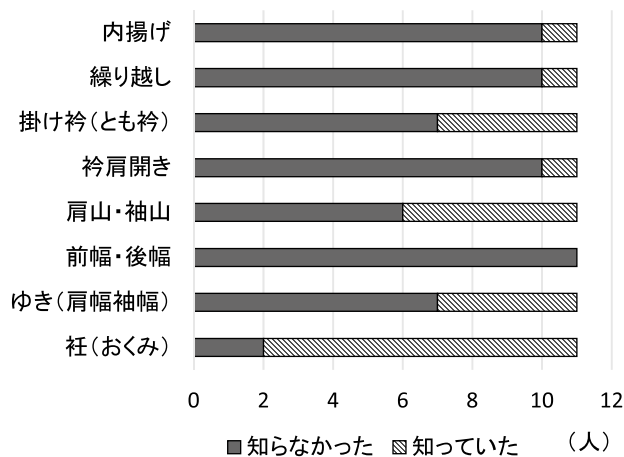


図2 ゆかた製作に関する名称の知識

3) 資料の分かりやすさとやり直した箇所（質問6の結果）

次に、ゆかた製作の各工程（20項目）について、配布した資料の分かりやすさとやり直した箇所を調査した（図3）。「肩当・いしき当て作り」「袖縫い」「背縫い」「いしき当て付け」「三つ衿芯」「脇縫い」「脇縫い代始末」「裾」についてはおおむね分かりやすいとの評価が得られたが、「見積もり」「衿付け」「衿肩開きの印」「衿付け」「衿先」「掛け衿付け」については、分かりにくいと4名以上が答えている。理解しにくい理由として、「見積もりについては「浴衣がどのようなつくりかほとんど知らなかったので、何をどう見積もっているのかわからなかった」等の意見が複数あげられた。ゆかたの構造が十分に理解できていないことが窺える。衿に関する工程については「図からしるしの付け方を読み取るのが難しかった」「家に持ち帰って付けようとしたが、プリントの図に行くまでの工程が分からず、他の動画を見た」「掛け衿の端っこの止め方が図だけでは全く分からなかった」などの意見が寄せられ、資料の図や説明が不十分であることがわかった。

やり直した箇所としては、「印付け」が5名と最も多く、「へらで印を付けたが、後に消えてしまった部分があり、チャコペンで付け直した」「1度しるしをつけても実際に裁断したり、縫ったりする際にどのしるしを見ればいいのか分からなくなってしまい、しるしを測り直した」などの回答があった。印が消え

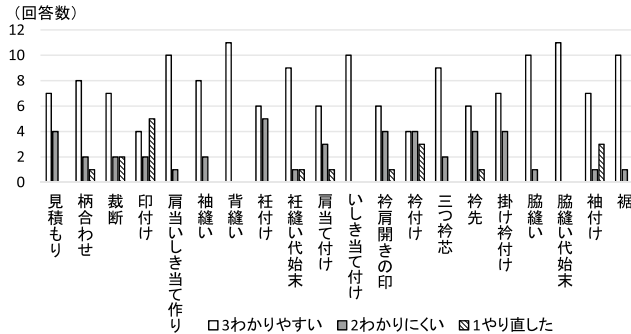


図3 ゆかた製作に関する資料の分かりやすさとやり直した箇所

るといふ単純なミスだけでなく、印の意味に対する理解が不十分であったことが窺える。平面上の印の位置や意味を理解するためにも、ゆかたの立体的な構造を把握することが重要である。次いで「衤付け」は3名がやり直し、特に「カーブのところ」に皺が寄ってしまい何回かやり直した」という意見が多くみられた。曲線的な衤肩回りの部分に直線的な衤布を縫い付ける工程は、ゆかた製作の中でも特に難しい部分である。また同じく3名が「袖付け」でやり直し、「折る場所と縫う線がどこになるのかが理解しにくかった」など身頃と袖との縫い合わせ方が分かりにくいことがわかった。昨年度も「印付け」で5名、「衤付け」で2名がやり直していたが、今年度は「袖付け」についても再検討が必要なことが明らかになった。

4) 実物見本の評価とその他教材の要望（質問項目7の結果）

次に、今年度の授業で使用した実物見本の評価とその他教材の要望について調査を行った。実物見本については、「衤付け」「衤縫い代始末」「肩当て付け」「脇縫い」「脇縫い代始末」「裾」が「分かりやすい」との評価を特に得たが、その反面、「衤肩開きの印」「衤付け」「三つ衤芯」「袖付け」について1～2名が「分かりにくい」と回答した。また実物見本を「見ていない」と答えた者も多く、十分に活用されていないことが判明した。原因としては、実物見本の周知が不十分であったこと、実物見本自体に名前や番号が付いておらず、どの段階の見本であるかを学生に理解してもらえなかったことなどが考えられる。筆者の観察した限りでは、「三つ衤芯」の実物見本が特に有用だったと感じられた。何枚もの布地が重なり合う衤については、どの部分に芯を付けるか、どこで縫い止めるか、平面的な資料の図だけでは判断がしづらく、構造や布地の上下関係を直接確認できる実物見本が理解を助けていた。

さらに、各工程についてどのような教材（実物・写真・動画）があるとよいかを尋ねたところ、図4の結果を得た。縫い始める前の準備段階である「見積もり」「柄合わせ」「裁断」「しるし付け」の工程についても実物見本の要望があった。特に裁断は失敗が許されない工程であるため、その点を確認できるような配慮が必要と思われる。写真見本は、全般的に必要なとされた。「プリントよりスライドのカラー写真で見た方が分かりやすかった」という意見が複数あげられ、モノクロで印刷した配布資料よりも、Web上に掲載したカラー写真画像の資料が評価された。Web上で操作できる写真画像は、細部を拡大して見ることもでき、分からないところを確認できる利点がある。動画の要望は、「衤付け」「衤先」「袖付け」に特に多く認められた。動画が必要とされた理由としては、「図面だけでは待ち針の動き方が全く分からなかった」「どちらから針が入ってどの向きに出ているのかよくわからなかった」など、製作者の動作とそれによって引き起こされる結果・展開がイメージしにくいことがあげられている。その点、動画は製作者

の一連の動作と製作工程の展開を合わせて示すことができる。以上より、各工程の製作特性や難易度に応じて、平面的な図や写真、立体的な実物見本、製作者の動作を確認できる動画を使い分けながら、教材の見直し・整備を行っていく必要があることが明らかとなった。

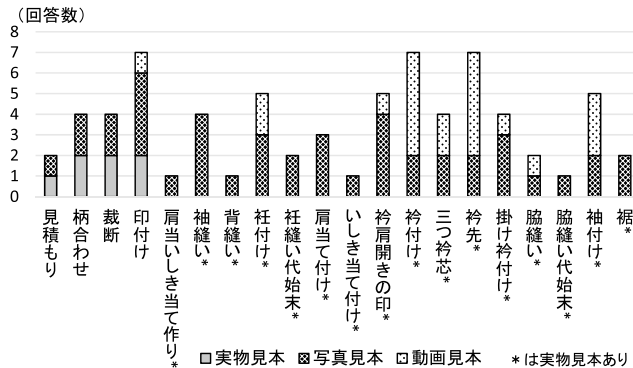


図4 ゆかた製作に必要とされる教材の種類

5) 授業以外の作業時間について (質問項目8の結果)

ゆかた製作の工程は多く、また各工程でかかる時間も相当な分量である。授業時間内で終わらせることのできなかつた作業は、授業の空き時間や自宅において取り組まねばならない。授業以外での作業時間を調査すると、最も作業時間の短い者で420分、最も長い者で1320分となった。総時間数を平均すると1人が毎回53.1分の作業時間である。全体的な傾向として、授業中盤以降に90～120分を超える者が多くなる。衤や脇の縫い代の始末、衤の本ぐけなどの手縫いに時間がかかるからである。三つ折りぐけなどの単純作業の繰り返しに時間がかかる一方、「図を見ながら家で作業するときは、初めから説明を読み直す所から始め、取り掛かるまでに何時間もかかる事があった」など、作業を始めるまでに時間がかかる場合があったことが窺える。ゆかた製作の各工程について、学生が考えたり悩んだりすること自体は学習にとって有意義でもあるが、あまりに長い時間がかかると学習意欲を低下させる恐れもある。説明や工程の分かりにくい箇所を特定し、それらへの対応をとることは、授業外の作業時間の短縮にもつながると思われる。

6) 授業の改善点の提案と実習を終えた感想について

授業の改善点としては、「二次元で示された図は裏も表も上も下もなかなか分からず、理解しづらかつた。そのため授業はじめのパワーポイントでの説明も理解が追いつかなかつた。それよりも先生が実際に裁縫しているところを近くで見た方がわかりやすい」「実物見本はわかりやすかつたので、動画や実演があるとより理解しやすそう」との意見があり、動画の他に実演の要望があげられた。

授業の展開については、「授業の最初に全てを説明すると、自分がその作業に入ったときには説明を忘れてしまっていることが多かつたので、説明→作業→説明→作業と細かく区切るのが良い」という要望があつた。授業での一斉説明を細かく区切り、説明後すぐに当該作業に取り組むためには、各学生の製作進度を揃えなければならず、各回の授業ごとに進捗状況を確認し、次回の授業までに課題を達成してくるよう指導する必要がある。

実習を終えた感想としては、「実習は時間がかかるものでとても大変だつたが、作品は予想以上に完成度が高かつた」「授業外での作業も多かつたが、楽しかつたので辛くはなかつた」「時間、技術的にきつい

部分も多かったが、今まで作った中で一番大作だと思う」など、ゆかた製作は決して容易ではなかったが、それをやり遂げた達成感が感じられている。さらに「一枚の布で作られているとはいえ、人の体に合うように丸みをつけたり、強度をつけたりするなど様々な工夫がされているのだなと分かってとても感心した。今までは柄や色など、目に見えるところで浴衣を楽しんでいたが、これをきっかけに構造的な面でも和服を楽しめれば良いと思った」「和裁が洋裁と違って縫った部分を見えないようにする工夫が多く、その分複雑な作りをしているところが面白いと感じた」など、製作を通して和服の構造や和裁の特徴を理解できたことも確認できる。和服文化をより深く理解するという本授業の学習目的を達成できていることがわかる。

4 まとめと今後の課題

ゆかた製作は、授業時間内ですべての作業を終えることが難しく、その教授方法は、授業時間外の学習についても考慮が必要であった。本稿では、授業時間外の学習にも対応可能な教材の整備を目指し、今年度の授業および使用した教材について、アンケート調査によってその評価を行った。以下、アンケート調査の結果からみえてきた課題とその改善策について検討する。

授業で使用した教材については、Web上に掲載したカラー写真入りの資料（パワーポイント）が有効に使用されたことが明らかになった。Web資料は作業場所を選ばず、いつでも確認することができ、授業外学習においても有用な教材となり得る。今年度作成した実物見本については、複雑な構造を確認する上で有用であったものの、学生への周知が足りず、活用が不十分であった。今後、実物見本の活用を促すとともに、授業時間外の学習においても参照できるよう各見本に番号と名称をつけ、実習室における閲覧環境を整えていきたい。また、アンケートで実物見本の要望があった「見積もり」「柄合わせ」「裁断」「印付け」など、縫う工程に入る前の準備段階についても、説明方法を見直し、各工程の特性に応じた教材の整備を考える必要がある。この他、画像や実物見本だけでは理解することがむずかしかった「衿付け」「衿先」「袖付け」の工程は動画を作成し、授業時間外でも確認できるようWeb上への掲載を検討したい。

また、昨年度・今年度ともに、やり直しの一番多かった工程は「印付け」であった。印が消えるという単純なミスについては、和裁の道具である「へら」だけでなく、チャコペンシルやチャコペーパーの使用を認め、完成まで印が消えないよう注意を促したい。また、印の測り直しは、各印が何のために付けられているのか、その意味が理解できていなかったことに起因した。ゆかたの構造や部位名称を十分に理解させるとともに、分からなくなった場合や印が消えてしまった場合に備え、各自の印の位置と寸法を図などに記録させ、いつでも立ち戻り、確認・復習できる資料を準備したい。

授業の運用面の課題としては、各学生により製作進度に差があるため、授業前半の一斉説明が全員に対して有効に機能しなかった点があげられる。これまでは進度の個人差を考慮し、前回の復習を含めて一斉説明を行っていたが、その分、説明時間が長くなり、作業時間が短くなる弊害があった。また説明が長くなると、自身が取り組む作業工程を忘れてたり、分からなくなったりする場合は生じていた。これらの弊害を解消し、一斉説明を有効に機能させるためには、全員の製作進度を揃え、説明後すぐに当該作業にとりかかる体制を整えることが望ましい。全員の進度が揃っていれば、前回の復習をする必要がなくなり、説明時間の短縮と作業時間の確保が可能となる。今後は、授業時間外の学習に有用な教材の整備に加え、製作進度を揃えるよう指導のあり方を見直し、ゆかた製作のより有効な教授法やその改善に取り組んでいきたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、服飾文化実習を担当されている扇澤美千子先生に丁寧な指導を賜った。この他、扇澤先生には実物見本の製作協力、指導方法の提案など多くの方面でご教示をいただいた。ここに深謝の意を表する。

注および参考文献

- 1) 和服に対する関心の高まりは、他大学にもあてはまる。三澤幸江・渡邊彩子「被服造形実習における現代の学生に適合した浴衣製作の試み」『群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編』40号、2005年、161-172頁。
- 2) 速水多佳子、黒光貴峰「大学生の家庭科における調理、被服製作の知識・技能の習得状況にみる課題」(『日本家庭科教育学会誌』57 (1)、2014年、14-21頁)や布施谷節子、高部啓子「家政系女子大生における手縫いの技法の実態—被服製作の知識と過去の経験との関連性」(『日本家庭科教育学会誌』43 (4)、2001年、273-278頁)など。
- 3) 難波知子・成田千恵・扇澤美千子「被服製作実習の改善策の検討」『茨城キリスト今日大学紀要 I 人文科学』50号、2016年、143-155頁。
- 4) 繰り越しとは、衿肩開きを肩山よりも後ろにずらしてあけることで、ずらした分だけ後身頃の裾を長く裁ち、あげをつくる(田中千代『服飾事典』同文書院、1969年、240頁)。昨年度の授業では、肩山から後身頃に2cm下げて衿肩開きの切り込みを入れ、内揚げをしたが、今年度は内揚げの工程を省略し、衿肩開きの位置のみ肩山より後に2cmさげた。
- 5) 内揚げとは、着物のあげを内側に畳み込んだ部分のことで、通常、後身頃の帯の下にあたる位置にくる(同上書、76頁)。繰り越しによって長く裁った後身頃の裾を、帯で隠れる胴の部分であげを取る。
- 6) ゆかた製作の方法や工程については、熊田知恵、森田萬里子、古松弥生、秋山真紀子『和服の基礎とゆかた製作』(創英社、2003年)と土井幸代『和裁』(同文書院、1990年)などを参照した。
- 7) 中村邦子「浴衣の製作実習に関する意識調査」『大妻女子大学家政系研究紀要』50号、2014年、75-79頁など。

